

湯浅先生のご退職にあたって

湯浅先生、ご退職おめでとうございます。

湯浅先生が実践女子大学にご奉職され二十三年になります。それ以来、今日に至るまで国語学（近代語）研究の第一線に立ち続けておられ、中でも辞書史に関して、特に大槻文彦の『言海』研究において残された業績は、後の研究者にとって大きな指針となっています。

私が初めて湯浅先生と出会ったのは、大学一年生時の「国語学概論」の講義であったと記憶しております。その後、ご縁をいただきゼミ生となり、大学四年間を過ごしました。卒業後は二年間、国文学科の助手として仕事をし、更にその後七年間、大学の事務の仕事をし、先生とは多くの時間を過ごしました。恐らく教え子の中で最も長い時間を先生と過ごしたのではないのでしょうか。その時間は、私にとつ

森 泉 加奈恵

てかけがえのないものとなっております。

私が学生だった時、まだ入学して間もない頃に先生とは出会いました。それは必修科目の講義でした。決められた曜日の指定された教員の講義を受講するというものでしたが、その指定された教員だったのが、湯浅先生でした。当時の私は、履修登録したばかりの講義を、日々受講することだけで精一杯。加えてどの講義も難しく、講義中は全く余裕がなく必死でした。そんなある日、「国語学概論」という講義の教壇に立つておられたのが先生でした。講義が始まると、春風のようにとても優しい口調で、何とも心地よいリズムで分かりやすく進められるその講義に、私はとても感激いたしました。それは大学生になり受講した講義で初めて「面白い」と感じ、「もっと知りたい」と思えた

講義でした。あの時のその感覚は今でも忘れられません。先生の講義では主に、「日本語」について歴史を学びながら、古くは江戸時代から現代まで使われてきた話し言葉・書き言葉について学んでいくものでした。当時私は「日本語」というのは、今現在生きている私たちが普段話し、書くものだけを「日本語」だと思い込んでいたため、「日本語」の示す世界がとても奥深く興味深いと感じました。また、それぞれの時代の「日本語」を知ることが、その時代の人たちを知り、その時代を感じる事ができる何と素晴らしい研究なのだろうと、当時胸がワクワクした覚えがあります。そして気が付けば、私はそのままとても自然な流れで、先生のゼミ生となりました。

湯浅ゼミは、とても明るく个性的で活発なゼミでした。「日本語」を知りたいと集まったメンバーという事もあるのかもしれませんが、それぞれ違う個性の人間が皆よく話し、よく考え、互いの調査内容についてよく議論しながら卒業論文制作に取り組みました。先生ご自身が、「日本語」を「話す・書く」ということを大切にされていたため、私たちもまた、目の前で話される言葉や、書かれた言葉に、とても真剣に向き合いながら日々を過ごしました。そんな私たちによく先生は「日本語は面白いです。今日の前で話されている言葉によく耳を傾けてください。そしてどんな

些細なことにも興味をもってください。今見えている景色と違った景色を見ることができそうですよ。」とおっしゃっていました。当時の私は、この違う景色を見てみたい一心で、卒業論文研究に励んだものです。私の研究テーマは、自分の足で出向き調査する事が多かったため、それはまるで山登りをしているような毎日でした。地道に一步步つ前に進む、変化に柔軟に対応しながら、特に困難な道を進む時には、先導者の後に続いて歩いていく。この繰り返しの中に、先生が示してくださいました、今まで見たことのないような、美しく魅力的な景色を見ることができると、私は知りました。

卒業後私は、国文学科の助手として、その後、大学の事務のお仕事で先生とは一緒に働く機会がありました。私が在職中に見た先生は大変ご多忙であり、その職務のご苦労は計り知れないものでした。そのような中でも、先生は常に共に働く私たちを気遣いながら業務をされておりました。そんな先生のお人柄に惹きつけられての事であったと思いますが、先生の周りには、いつも笑顔で生き生きと働く人たちが集まっていました。また、私が仕事でつまずき、どうしようもない状況にあった時、先生は私のその様子を気にかけてくださり、「教え子」としてたくさんアドバイスをくださいました。そしていつもアドバイスの最後に

は、「あなたらしく顔を上げて、前を向いて進んでいってください。」と、激励してくださいました。今でも時々、先生の声とともに、その時にいただいた言葉が思い出され、奮い立たされることがあります。

湯浅先生は二〇〇七年度から十二年度までの六年間、第十三代学長を務められました。その間、大学・短期大学の改革をされながら、国文学科教授としても研究や指導を並行して行いました。中でも、十四年に実現させた大学・短期大学の二校地化、下田歌子研究所の開設については、特に力を注いでおられ、後の方向性を決めるべく奔走されました。また、現在、大学・短期大学の学生向けに実施されている、『夏季セミナー』『がくたび』を初めて企画し実施したのも湯浅先生であります。

すぐ近くで、先生の生きざま、研究に対する姿勢やお人柄にふれ、生の教えをいただく事ができました。更には学生に対しての思いやりや接し方まで、教えていただいた事は教え切れず、本当に感謝してもしきれない思いがあります。研究者として数々のご功績を残しながら、実践女子大学・短期大学部のみならず、実践女子学園全体の発展にご尽力された湯浅先生。今後は実践女子中学高等学校の校長職と、新たな道を進むこととなりました。しかし、先生の真つすぐに前を見据え突き進むお心があれば、必ずまた成

果を残されると信じております。

この二年、コロナ禍という未曾有の事態において簡単に価値観やライフスタイルが大きく変動してしまうことが図らずも示されてしまいました。その様な時代でも清く、正しい道を自ら選び、進んで生き抜く人材を世に輩出すべく、育成と共に学びを实地にかせる学園づくりを、先生は今後なさっていくのだろうと思います。今後のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(もりいずみ かなえ・平成17年度卒業生)